

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2020 冬号

93

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集

吉原遺跡の発掘調査成果



吉原遺跡発掘調査地と煙樹ヶ浜をのぞむ（北から）

特集 吉原遺跡の発掘調査成果

はじめに

吉原遺跡は、紀伊半島中部の、日高郡美浜町吉原に位置し、太平洋をのぞむ海岸砂丘上に所在します。

吉原遺跡の位置する日高平野は、日高川下流域にあたります。この平野には、縄文時代早期の土器が出土する御坊市尾ノ崎遺跡、三重の環濠をもつ弥生時代前期の集落跡である御坊市堅田遺跡など、多くの遺跡が存在し、



図1 周辺遺跡分布図

太古の昔からの人々の暮らしが窺えます。

今回の調査では、令和2年7～9月、新浜集会場新築工事に伴う発掘調査を昭和62年度調査地の南接地で実施しました。調査では、弥生土器の鉢、須恵器の甕と高坏の埋納遺構を1基ずつ確認しました。これらは土壙墓の可能性が高いと考えられます。各時代の墓域の広がりを考える上で、貴重な調査成果を得ることができました。

既往の調査

吉原遺跡は、これまでの発掘調査によって弥生時代中期から古墳時代、平安時代、中世から近世の墓域が展開していることが知られています。

昭和62・63年度に、県道柏・御坊線改良工事に伴って実施された発掘調査では、弥生時代中期から庄内式併行期の方形周溝墓や土壙墓が、また、本遺跡の東側で実施した平成28年度調査では、中世から近世の火葬墓が確認されました。

吉原遺跡の方形周溝墓は、昭和63年度調査

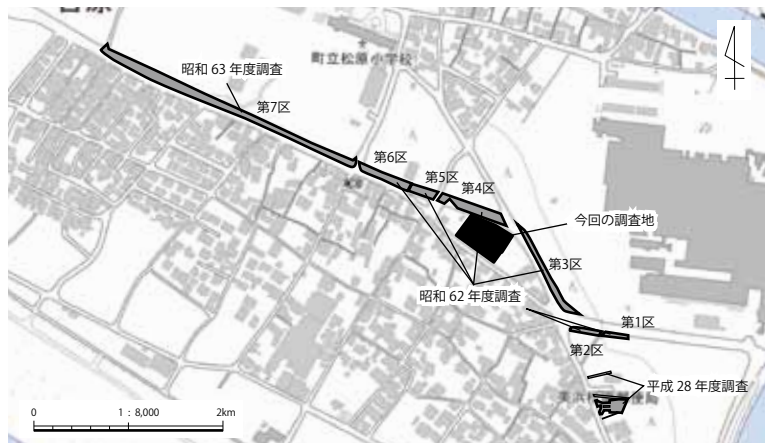


図2 既往の調査位置図

の第7区で4基が確認され、いずれも明確な埋葬主体部は確認できませんでした。方形周溝墓(写真1)は、周溝部埋土から弥生時代中期前葉の完形の土器が横転した状態で出土したことから、和歌山県内の最古級のものと考えられます。県下の方形周溝墓の出現は、弥生時代中期後葉とする説もありますが、本遺跡ではそれを遡る方形周溝墓が2基確認されています。

土壙墓は全長1～2mのものが多く、全長3.2m以上の、大型墓壙4基も確



写真1 昭和63年度調査第7区方形周溝墓（北西から）

認められています。墓壇内に供献（お供え）や副葬された土器は、弥生時代から古墳時代初期（庄内式併行期）では壺と甕であり、墓壇の壁際に置かれることが多く、墓壇内に二個体が置かれることもありましたが、多くは土器一個体を供献の基本としています（写真2）。

昭和62・63年度調査における墓域は、弥生時代中期とみられる遺構がほぼ全域で見られましたが、より古い時期のものは調査区東半に偏っていました。弥生時代後期から古墳時代初期（庄内式併行期）にかけての遺構は第



写真2 昭和62年度調査第3区土壇墓（南西から）

4区西端から第7区に限定され、被葬者の属する集落立地の変遷によるものなのか、時期により墓域の変化が見られました。

平成28年度調査は、都市防災総合推進事業に伴う発掘調査として実施しました。奈良時代から平安時代の土坑、中世以前の列石状遺構、中世から近世の火葬墓など（写真3）を確認されました。

調査では、ほぼすべての火葬墓から鉄釘が出土すること、墓の中にまとまって焼けた人骨が出土すること、火葬墓の壁が火で焼け固



写真3 平成28年度調査4区火葬墓土層断面（南から）

まっていなかったことが確認されました。

このことから別の場所で茶毘にふされた後、木箱などに遺骨を納め、埋葬したと考えられます。人骨片、鉄釘の他、土師器皿、銭貨「寛永通宝（古寛永銭）」などが出土しました。

吉原遺跡は、弥生時代から平安時代の墓域として知られていましたが、それより新しい時期である、中世から近世についても海側へと場所を移動しながら、火葬墓の墓域として利用されていたことがわかりました。詳細は

『風車2016冬号(77号)』の短信「吉原遺跡発掘調査」で紹介しています。

今回の調査

今回の調査では、集会場予定地1, 550㎡における樹木の伐根に伴う立会調査と、集会建物部分(2区)と擁壁部分(1-1: 1-2区)の約720㎡における発掘調査を実施しました。

土壙墓の可能性のある土器埋納遺構2基、



写真4 令和2年度調査2区弥生土器埋納遺構(西から)

土坑、小穴、溝など、弥生時代と古墳時代の遺構が確認されています。

弥生時代の遺構

弥生土器埋納遺構(写真4)は、2区南部に位置し、中央底部で弥生土器の鉢が横に傾いた状態で出土しました。弥生時代中期ごろの土壙墓の可能性ががあります。

その他、広口壺の口縁部や櫛描きで波状文を施した壺体部、甕などの弥生時代中期の土器片が出土した溝、壺の体部片が出土した土坑も確認しました。

古墳時代の遺構

須恵器埋納遺構(写真5)は、2区西部に位置し、上部で横倒しになった須恵器甕と、中ほどで逆さになった須恵器高杯が出土しました。骨片などは確認できませんでしたが、古墳時代中期の土壙墓の可能性ががあります。

その他、古墳時代中期中葉の須恵器の杯蓋口縁部が出土した土坑も確認しました。

まとめ

今回の発掘調査では、土壙墓の可能性の高い、弥生時代中期ごろの弥生土器埋納遺構、古墳時代中期の須恵器埋納遺構などを確認したことにより、当該地区が弥生時代や古墳時

代の墓域と埋葬に関連する祭祀場として利用された可能性ががあります。

また、調査区南側で弥生時代中期前葉と思われる、紀伊型甕の口縁部が出土していることから、当該期の墓域が南への広がることが推測できます。

今回の調査では、古い段階の砂堆の稜線から後背地にかけて発掘し、弥生・古墳時代の墓域の広がりや土地利用を考える上で、貴重な調査成果を得ることができました。

(田之上 裕子)



写真5 令和2年度調査2区須恵器埋納遺構(西から)

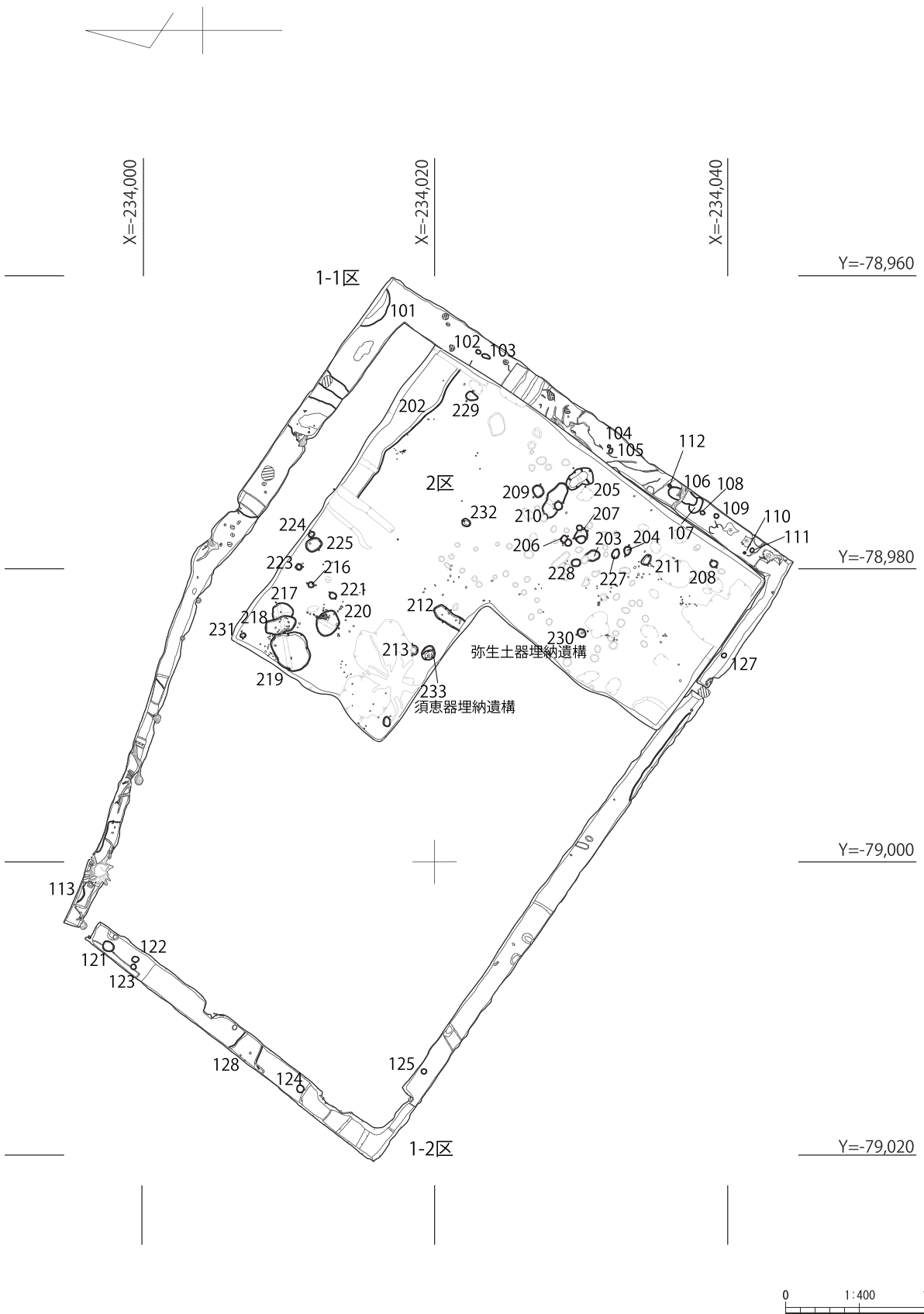
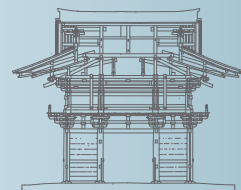


図3 令和2年度発掘調査区平面図



丹生官省符神社本殿の

保存修理

丹生官省符神社本殿は空海が高野山を開創するために、この地に政所を置いたことにより勧請されたといわれています。15世紀中頃から紀ノ川の氾濫を危惧して社地の移転がされ、現在の社殿については、第一殿、第二殿は同型式で墨書から永正14年（1517）、第三殿は棟札から天文10年（1541）に建てられたことがわかって

います。

本殿は昭和40年5月29日に重要文化財に指定されました。前回の屋根葺替から20年が経過した本年度に、文化庁や和歌山県、九度山町の補助金を受けて修理事業を立ち上げ、主に箱棟の破損と檜皮葺の屋根、塗装の修理を進めています。事業は令和3年3月末までを予定しています。

今回、屋根の檜皮葺きを解体したところ、檜皮の腐れは軽微なもの、檜皮全体に経年による劣化が進んでおり、竹釘が緩んだ

状況であることが確認されました。また、屋根下地の隙間から小屋組を覗くと、昭和51年の解体修理時に保管された部材を認めることができました。どれも近世以前に遡ると考えられる部材です。

塗装については、各殿で現状の丹塗り面を掻き落としたところ、前回修理以前の塗装痕跡が確認できました。その旧塗装面で、現状の鉛丹とは異なる濃い色目の赤色顔料、青色系の顔料を見知しました。今回の塗装工事は部分塗り替えですので、復元的な修理は行いませんが、小屋裏で確認した、同様の痕跡を持つ部材との共通点を認めることができ、少なくとも本殿には弁柄塗の時期があったことが推定されました。

令和2年12月に、屋根の檜皮葺き上げ、箱棟木部修理とともに、彩色部分の剥落止めと補筆修理、施工範囲の塗装と飾り金具の補修取付が完了しました。

現在、素屋根解体と周辺整備の準備を進め、大詰めを迎えており、無事に本事業を完了出来ればと思います。

（大給 友樹）



屋根工事完了状況（東からみる）



小屋組部材（上）と旧塗装面（下）の痕跡

建具のはなし③ 旧中筋家住宅 — 付書院の明障子 —

江戸時代の大庄屋の邸宅であった旧中筋家住宅（和歌山市榎宜）には、主屋の北側に二〇畳敷きの大広間が設けられています。鷹狩りの際の藩主の休憩所として整えられたとも伝えられ、西面には紀州藩御用絵師・野際白雪の富士山の絵が表具された天袋などが配された、豪壮な床構えが設けられています。その脇には文机のような台を広縁側に張り出す付書院が設けられ、欄間の下に窓のように四枚建ての明障子が建て込まれています。当初読み書きしたりするために設けられた施設の名残りと考えられています。次第に文具を飾ったり、床に外光を取り入れる設えとして扱われるようになっていきます。

それは明り取りと云うよりも、むしろ側面から射して来る外光を一旦障子の紙で濾過して、適当に弱める働きをしている。

『陰翳礼讃』 谷崎潤一郎

旧中筋家の大広間では、付書院が庭に面した北側に設けられており、直接日光が届かない明障子は、昼間の間接照明の様に障子紙を白く際立たせているだけのように感じます。しかし、部屋全体の明るさにあわせて写真を撮影してみると、床を、そしてその前に坐る人を荘厳に浮かび上がらせることがわかります。

格子に組まれた細かい棧に白い紙が貼られただけの、儂げで華奢な明障子。実は劇的なまでの深淵さを演出する装置なのです。（多井 忠嗣）



きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

埋蔵文化財課 三次元計測とその活用

近年、3Dや三次元といった言葉が一般的になってきました。文化財の分野でも、物体を三次元計測する事例が増えています。

三次元計測とは、複数枚の写真をソフトで処理したり、レーザーによって計測したりするもので、物体の3Dモデルを作ることができ、様々な分野で利用されています。文化財の分野での活用事例は、和歌山県立博物館が行っている「お身代わり仏像」製作や、首里城が焼失する前に撮影した写真を用いて、3Dモデルを作成するといったものがあり、テレビや新聞で見たことがある方もいるかと思いますが。

当文化財センターでも、数年前から発掘調査で三次元計測を行うことが増えてきました。これまでは測量会社に依頼していましたが、2年前に実施した道の川集落跡発掘調査（風車89号特集で紹介）では写真撮影からソフトでの処理までを自前で初めて実施しました。

発掘調査において三次元計測を行う事例は、全国的に増えてきており、石垣などのように手で測ると時間や手間がかかるものや、井戸のように入って測ると危険なものなどで利用が進んでいます。また、記録のために三次元計測した3Dモデルを公開したり、模型を製作したりといった活用も増えてきています。

コロナ禍で自宅にいる時間が増え、なかなか遠くに行けないことから、遺物の3Dモデルを見ることができるようバーチャルミュージアムや、発掘調査現場の3Dモデルを見て参加するバーチャル現地説明会といった、VR（バーチャル・リアリティ）を利用した新しい普及活動がこれから一般化していくのかもしれない。これまでのように、計測・記録して終わるのではなく、それを活用していくことが、令和の時代に求められているのではないかと思います。

（山本 光俊）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2020年冬～2021年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 「記念物 100年」展 2021年 3月 2日(火)～2021年 4月 4日(日)
- 春期企画展「紀州の獅子と獅子頭」 2021年 3月 20日(土)～2021年 5月 9日(日)

高野山霊宝館

- 冬期平常展「密教の美術—経典と仏さま」
後期:2021年 2月 9日(火)～2021年 4月 11日(日)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、期間変更や中止となる可能性があります。
掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。



目次

- 1 表紙
- 2 特集「吉原遺跡の発掘調査成果」
- 6 文化財建造物課 短信「丹生官省符神社本殿の保存修理」
- 7 きのかに歴史小話「建具のはなし③ 旧中筋家住宅 一付書院の明障子」
「埋蔵文化財課 三次元計測とその活用」
- 8 催し物案内

風車93 (2020・冬号)

令和2年12月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp

LINE 公式アカウント
ID: @942tjyhk

